

## 遺跡発表2. 佐倉市

# いのながわり 井野長割遺跡（第5次）

— 「盛土」に表された縄文人の世界観 —

主任調査研究員 小倉和重

### 遺跡の立地と周辺の遺跡

遺跡は佐倉市井野字長割835-1ほかに所在し、佐倉市の北西部、八千代市との市境に位置する。遺跡が立地する台地は、北から二股に分岐して入り込む樹枝状の小支谷によって東西を画された標高約27mの台地である。台地は三角形状を呈し、東西両側は急斜面を形成している。南側は小支谷の谷頭にあたり、比較的緩やかな斜面が形成されている。今回の調査地点は、市立井野小学校の校庭にある「井野っ子山」と呼ばれる自然観察園内であり、遺跡の北端に相当する部分である。

周辺には、東側小支谷を挟んだ対岸の井野安坂山遺跡がある。平成13年4月に対象面積30,200㎡のうち3,020㎡について確認調査をおこなった。その結果、中期末葉（加曽利E4式期）の土坑、埋設土器が検出されたが、井野長割遺跡と関連する時期の遺構は確認されなかった。より広範にみると、印旛沼西岸域に佐山貝塚（八千代市）、神野貝塚（同）、北岸に戸ノ内貝塚（印旛村）、船作第1遺跡（石神台貝塚）（同）、南岸の鹿島川下流域に遠部台遺跡（佐倉市）、曲輪ノ内貝塚（同）、神楽場遺跡（同）、吉見台遺跡（同）、千代田遺跡群（四街道市）、さらに鹿島川を遡っていくと坂戸草刈堀込遺跡（佐倉市）や宮内井戸作遺跡（同）などの印旛沼周辺域を代表する後期～晩期の拠点集落が2km～2.5kmごとに分布している。

### 調査の目的と方法

調査は、第4次調査（平成13年）で確認された東側斜面に沿って形成されている盛土が続いているのかどうか、続いているとすればその内部、下部構造はどのようになっているのかを把握することを目的とし、平成14年3月1日から3月29日までおこなった。調査面積は、対象面積2,700㎡のうち111㎡である。

調査は現地形と東側隣接地の盛土とのつながりを考慮して、盛土を縦断するかたちでトレンチ（調査坑）を南北方向に設定した。本来ならば、南北に1本とおすかたちでトレンチ設定をすれば盛土の断面

観察には最良であったが、植樹や自然観察路が調査区内に存在することから、それらを避けるかたちで設定せざるをえなかった。

トレンチは幅2mを基準とし、長さは上記した障害物を避けて適当なところで区切った。南側から北側に向けてA、B、・・・Gとアルファベットを付けて南北方向のトレンチとした。また、その東側にT字形にHトレンチとIトレンチを設定した。

### 調査の成果

今回の調査により、「井野っ子山」が縄文時代の盛土の続きであることが確認された。しかも、きわめて良好な状態で残っていることも判明した。前回の調査成果（『第5回遺跡発表会発表要旨』を参照のこと）と合わせて盛土規模を推測すると、基底部分の直径約80mとなる。出土遺物は、土器（中期～晩期）や石器（石鏃・石皿・磨石・打製石斧・磨製石斧）のほか、土偶や石剣、耳飾、丸玉、ミニチュア土器、土製円盤、有孔円盤が出土した。また、貝塚からは獣骨も出土しており、それらの遺物総数は54cm（長さ）×33cm（幅）×15cm（深さ）の収納箱で約90箱に及ぶ。

調査区内のもっとも低い部分（南側）と盛土頂部との比高差は、約1.2mである。各トレンチにおける地山（ローム）面を見ると、住居跡部分を除いて調査区南側、Bトレンチ付近から急に傾斜していることがわかった。Fトレンチ以北についても若干傾斜してはいるものの、南側の傾斜とは明らかに様相が異なる。また、AトレンチではいわゆるAT（始良・丹沢火山灰）層が認められなかった。

以下、各トレンチの調査所見について述べる。

Aトレンチは盛土内側のもっとも低い位置に相当するトレンチである。遺構は皆無であり、出土した土器の量も少ない。表土からローム面までは60cm～70cmほどである。

BトレンチからCトレンチにかけてはピット群が多数検出された。ピット群はHトレンチでも多数検出されたことから、これらのトレンチを結ぶライン

上（盛土内側裾部に相当する範囲）に集中して分布していることが推測される。ピットの深さは、確認面（地山面）から約15cm～85cmほどである。これらの一部は、竪穴住居跡か掘立柱建物跡などの構築物の柱穴と考えられる。トレンチの土層断面を観察すると、後期の盛土層を掘り込んでいるものも認められることから、後期（加曾利B式期）以降に構築されたものと考えられるが、今後は構築時期を含めた遺構の性格について検討する必要がある。

Dトレンチでは、柱穴状の遺構（ピット）と土坑が検出された。ピットの深さは約25cm～45cmである。また、表土下に骨粉や獣骨を含む黒色土が堆積する範囲が確認され、その土層レベルで出土する土器量が他の層にくらべて多い傾向が認められた。このように、土器の出土量が多い層と少ない層とが認められたことから、なんらかの遺構が存在した可能性、あるいは、土器の集中廃棄がなされた可能性が考えられる。

Eトレンチでは、南端部で黒色土が落ち込んだ土坑が2基検出された。1基は深さが2m近いもので、貯蔵穴と考えられる。また、晩期前葉（安行3a式～安行3b式期）と考えられる住居跡がFトレンチ南端部にまたがって1軒検出された。

住居跡を覆う層は、関東ローム層とみられる黄褐色（ローム質）土と黒色土に大別できる。そのうち、後者の土層には晩期前葉の遺物が含まれていた。このことは、晩期前葉に住居が廃絶した後、短期間のうちに同じ晩期の土層によって被覆されたことを示す。以下、二つの土層について所見を述べておきたい。

黄褐色土はEトレンチより南側のトレンチでは確認されないものの、北側のGトレンチまでは自然堆積した状況が確認できた。なお、この黄褐色土は第4次調査区の東側斜面部の谷を埋め立てた土と近似している。第4次調査における黄褐色土の堆積状況を見ると、（埋没）谷部や盛土外側（斜面部）には堆積が認められるものの盛土内側には形成されていない。しかも、堆積は（埋没）谷部において最も厚く、2mを越すものと推測される。

黒色土はすべてのトレンチに均等に分布しているわけではなく、Iトレンチでは黒色土そのものの堆積が認められなかった。黒色土の堆積を観察すると、明らかに人為的な盛土が為された痕跡は認められず、自然堆積の様相を呈していた。Iトレンチで黒色土が確認されない現象は、本来存在したであろう黒色土を削り他所へ運んだ可能性も考えられるが、

狭小な調査面積のためそこまで確認するには至らなかった。以上のような所見から、各土層が均等に環状に積み上げられたのではなく、土を投棄する方向がそのつど選択されていた可能性が考えられる。とくに、第4次調査区の埋没谷部への黄褐色土の投棄は、他の斜面部とはくらべものにならないほどの規模である。住居跡を覆う黒色土は他の混入物をほとんど含まない漆黒色を呈する。堆積の厚さはトレンチの南北端で30cm前後であるが、住居跡部分では約50cmある。住居跡が深く掘り込まれた分だけ厚く堆積したためと考えられる。

次に、住居跡についての所見を述べる。床面までの掘り込みは約35cmである。出土遺物は、黒色土層下部からその下の黄褐色土層にかけて比較的密に分布していた。南壁寄りの床面からは、石皿が水平に置かれた状態で出土した。

住居跡は、土層断面と炉（地床<sup>じしゅうろ</sup>炉）に新旧関係が認められたことから、少なくとも一回建て替えられたことが判明した。建て替えに伴い炉の位置をわずかにずらしている。最終段階の炉は、床面より1段深く掘り込んだ燃焼部に灰が厚く堆積していた。燃焼部を含めた焼土の分布範囲は、調査区内で1m×1.9mほどである。また、炉とは別に床が被熱により赤色硬化し、焼土が分布している部分が炉の西脇に径40cm～50cmの範囲で認められた。床面は壁際を除いてほぼ全体が硬化していた。しかし、部分的な調査のため住居の形状や柱穴配置については不明である。なお、住居跡よりも新しい段階の遺構は認められなかった。

FトレンチからGトレンチにかけては、ピット群などの遺構は皆無であった。さらには、Eトレンチにおいても、Dトレンチ寄りに土坑が2基確認されたのみで、住居跡を含めた北側には遺構が存在しないことも注意される。すなわち、遺構の分布の限界（北限）は、晩期前葉の住居跡付近と考えられる。出土遺物は土器の小破片が少量のみであった。Gトレンチでは、表土下60cm～70cmでローム面に達する。

Hトレンチは全面にピット群が分布している。ピットは深さ25cm～1.07mのものまでであるが、他のトレンチのピットとくらべて70cm以上の深いものが目立つ。なお、ピットの覆土中から丸玉（硬玉製）が1点出土したが、流れ込んだものとみられる。

次に、貝塚について述べておく。今回の調査ではCトレンチとIトレンチから貝塚が検出された。しかし、Iトレンチについては時間的な制約からすべてを調査することができなかった。

Cトレンチの貝塚は、盛土頂部よりやや内側（南側）、トレンチ北端の下層に堆積していた。トレンチの断面観察によると、レンズ状の堆積を呈する。貝種組成の主体は汽水産のヤマトシジミである。形成時期は堆積レベルと周囲の出土土器から判断して、後期後半と予想される。

Iトレンチの貝塚は、盛土頂部に堆積している。トレンチの東端、中央、西端部のおおまかに3箇所分布しているが、細かく見ると5つのブロック（まとまり）が確認できた。形成時期は出土土器から判断して、晩期前葉（安行3a式～3b式）と考えられる。中央部の貝ブロックは、表土下の晩期の層を掘り込んで径1.6m、厚さ25cm～40cmほどの規模で堆積しており、土層断面を観察すると、純貝層、混貝土層などのいくつかの廃棄ブロックに分けることができる。なお、純貝層には大量の灰が混ざっていた。

貝種組成はCトレンチ同様にヤマトシジミを主体とするほか、ハマグリ、ムラサキガイなどの鹹水産貝類が若干含まれる。このような組成、及びほとんどが完形であることは、第4次調査区で検出された斜面貝塚と一致する。トレンチ中央部の貝ブロックについては、住居跡等の遺構内に廃棄された可能性も考慮したが、それを結論付けるまでにはいたらなかった。盛土をローム面まで掘り下げたが、住居跡床面のような痕跡（炉や柱穴の存在、硬化面）は認められなかった。また、トレンチの土層断面を観察しても、住居の壁と見られる立ち上がりは認められなかった。ただし、貝ブロックを挟んだ両側の土層では、貝ブロックの下面に相当すると考えられるレベルにおいて硬化面が確認されたことは注意を要する。

今回の貝塚の検出により、貝の廃棄場所が第4次調査時に確認された盛土外側（斜面）に限らず、盛土頂部とそのやや内側（裾部）にも広がっていることがわかった。

## 問題点と研究の視点

まず、盛土とその他の遺構（住居や土坑など）の配置関係について見ておきたい。集落の中央に窪地を有する環状、あるいは馬蹄形を呈する集落にあっては窪地に遺構は希薄で、窪地を同心円状に囲んで土坑や住居跡が分布することが知られている。しかも分布の変遷をみると、多くの場合窪地部分に遺構が入り込むことがない。遺構は常に盛土中、あるいはその裾部に構築されるという傾向が認められ、あ

たかも窪地が不可侵的な場であるかのようなのである。今回の調査でも集落の最終段階に営まれたと考えられる晩期前葉の住居が、盛土外側裾部に位置している。居住の場と盛土の場が同じサークル上を共有していることから、居住域を避けるかたちで盛土が行われていたのであろう。

次に、盛土と（馬蹄形）貝塚との関係について触れておきたい。盛土は、その形状において馬蹄形貝塚と共通する。両者は、貝と土の違いだけで、環状、あるいは、馬蹄形というような円を基調とするかたちに「盛る」という共通の行為によってかたちつくられたものなのである。これまでの調査で確認された貝塚が、盛土中において広い範囲に形成されていたということは、両者の密接な関係をうかがわせる。

一見馬蹄形を呈する貝塚も、実は小単位の廃棄ブロックの集合であり、最終的な景観が馬蹄形を呈しているにすぎないことがわかってきている。盛土についても同じような状況が推測できる。盛土と貝塚は、いわば「円環」という平面方向と「盛る」（または「埋める」）という垂直方向の2つの方向性を有する点において、円環を意識した空間構成が長期間にわたり踏襲された縄文人の世界観が目に見えるかたちで表されたものと言えよう。

遺構の分布が希薄である中央窪地は、当初から窪地状を呈した自然地形を集落の空間構成の中に取り込んだ場合もあったであろうが、一方で、そこに存在していたであろう遺構が、後の住人の整地行為により破壊された場合も考えられる。その傍証として、盛土中からは後期から晩期の土器に混ざって、中期（加曾利E式）の土器片も少量ながら出土している。また、盛土中から出土する土器型式を見ても、必ずしも上下の層で新旧の土器型式が区別できるとは限らない。同一の土層において新旧の土器型式が混在して出土する場合もある。このことは、中央窪地を含む周囲の遺構、あるいは盛土自体を破壊しながら盛土行為をおこなっていたことを示唆するものと言えよう。

これまでの調査により、盛土は一度につくられたものではないことが判明している。複数回の整地行為が、特定の「事由」に伴っておこなわれた結果形成されたものと考えられる。しかし、盛土と直接的な因果関係にあるであろう整地行為が、どのような事由に伴ってなされたのか、ということが今後の大きな争点と言えるだろう。また、遺跡ごとの盛土規模の差は、集落廃絶後の最終景観を比較した結果にすぎず、中央窪地の整地行為の規模や期間によって

平面的に広くもなるし、垂直方向に高くもなる。盛土規模はそうした要因と密接にかかわるのであり、盛土は必然的に一過性の小規模集落ではなく、拠点的（長期継続型）集落に付随する性格のものと言える。そして、One Moment（ある一時点）の整地行為（盛土行為）の景観（「最終景観」に対して「途中景観」とでも言おうか。）がどうであったのかも興味をもたれる。

また、盛土の土量を考慮してみても、一集落の構成員だけでは為し得る規模ではない。周辺集落から事あるごとに人々が集い繰り返し祭祀儀礼をおこなうとともに、整地・盛土行為がおこなわれていたのではなかろうか。想像を逞しくすれば、周辺の盛土を有する（拠点的）集落を周期的に移動しながら盛土行為をおこなっていたのではなかろうか？そして、祭祀儀礼の時に使われた土偶や石棒・石剣などの特殊遺物は、整地・盛土行為とともに廃棄されたのであろう。盛土中から土器や石器などの日常什器と祭祀遺物が混在して出土する状況は、そこが日常生活や祭祀儀礼行為に供された「モノ」が行きつく最終の場であったことを想起させる。

しかし、部分的な発掘調査をおこなったにすぎない現段階にあっては積極的な根拠に乏しい。今後の整理作業での分析を通して、他の遺跡と比較しながら検討していく必要がある。

そして、最後に盛土の出現と消滅の問題をあげておきたい。これまでの調査により把握できた盛土中からの出土土器は、中期後葉（加曾利E式期）から晩期中葉（安行3d式期）までのものであるが、後期中葉（加曾利B式期）以降の土器がほとんどを占める。なかでも、後期末（曾谷式～安行式期）の土器が多い傾向が認められた。このことから、盛土は遅くとも後期中葉には形成され始め、晩期中葉まで

続いていたようである。そして、晩期中葉を境に盛土行為は終息し、集落も終焉を迎えたのではなかろうか。

この晩期中葉の時期は、関東地方の土器（型式）の様相に限ってみると、晩期前葉に顕著にみられた小地域差が解消されてくる時期にあたる。その背景には、それまでにも関東地方に影響を与えていた東北地方の（亀ヶ岡）文化がより強大な影響力をもってきたことがあげられよう。この晩期中葉以後ともなると、印旛沼沿岸域に限らずムラとして把握できる遺跡がきわめて乏しくなる。そして、晩期後葉に入ると西日本では稲作農耕（水田耕作）が採用され始め、弥生文化（稲作農耕文化）と縄文文化（狩猟・漁労・採集文化）との接触が表面化してくる。

そのような時代背景を考えると、印旛沼沿岸域（あるいは、より広い範囲）における盛土の消滅は、縄文時代の末期にあって、そこに新たな社会・文化的な変化が生じてきたことを物語るのではなかろうか。そして、長期間にわたり踏襲された「円環の秩序」が崩壊し、新たな（地域）文化の萌芽へと歩みはじめたのではなかろうか。そして、「円環の秩序」に替わる新たな社会秩序（世界観）が形成されたのではなかろうか。しかし、このあたりの事情については、より広域かつ様々な観点（文化構成要素の研究）から検討を加えていかなければならない問題であって、推測の域を出ない。

ただ、筆者は以上のような視点で盛土を有する集落を見た場合、印旛沼沿岸域においては晩期中葉の時期が晩期縄文文化の一つの変革期として捉えられるのではなかろうかと考えている。また、そうした視点から盛土の有無にかかわらず、当該地域における拠点的集落を見ていく中で、井野長割遺跡の位置付けについて考える必要があるように思う。

年代	本書における時期区分	土器様式	土器型式		印旛沼南岸域の主な拠点的集落遺跡										
			関東地方	東北地方	井野長割	神楽場	吉見台	江原台	宮内井戸作						
約4.1 年前	前葉	称名寺式	称名寺1式	(略)	?	?	?	?	?						
			称名寺2式												
	堀之内式	堀之内1式	?							?	?	?			
		堀之内2式													
約3.5 年前	後葉	加曾利B式	加曾利B1式	(略)	?	?	?	?	?						
			加曾利B2式												
			加曾利B3式												
	曾谷式	曾谷式	?							?	?	?			
		安行1式													
		安行2式													
	前葉	安行式	安行3a式							?	?	?	?	?	?
			安行3b式												
			安行3c式												
			安行3d式												
約3.0 年前	中葉	前浦式	前浦1式	?	?	?	?	?							
			前浦2式												
	亀ヶ岡式	大洞B式	?						?	?	?				
		大洞C1式													
後葉	状浮線網	大洞A式	?	?	?	?	?								
		大洞A'式													
約2.4 年前	後葉	荒海式													

印旛沼南岸域の主な拠点的集落遺跡の消長（後期～晩期に限る）